

鉄門室内楽の会 五月祭演奏会 プログラム

2019年5月18日(土) 11時 - 14時45分 於：医学部本館3階大講堂

1. 2つのバイオリンとピアノのための5つの小品 (ショスタコーヴィチ)

1st. Vn. 松島康太 (5年), 2nd. Vn. 川本哲史 (5年)

Pf. 田頭祥之助 (5年)

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ (1906-1975) は旧ソビエト連邦の作曲家です。交響曲の大家として名高く、特に交響曲第5番や第7番『レニングラード』が有名です。これら両作品のような重々しく壮大な曲調の作品が有名なこともあってかしばしば共産主義体制に迎合的な作曲家との評がみられますが、一方で1979年にソロモン・ヴォルコフによって発表された『ショスタコーヴィチの証言』に代表されるように、ソ連共産党が求める音楽と自分が求める音楽の乖離に苦しんだ作曲家だとする見方もあります。このあたりの議論は非常に興味深いので、気になる方はぜひ自分で勉強されてみてください。

さて、今回演奏する作品は、ショスタコーヴィチの友人 Levon Atovmyan がショスタコーヴィチの作曲した映画音楽、バレエ組曲から5曲抜粋して2台のヴァイオリンとピアノで演奏できるように編曲したものです。どの曲も優美かつ親しみやすい旋律で、この作品からもショスタコーヴィチが単なる体制に迎合した作曲家ではないということが感じられるかもしれません。今年の1月から一緒に病院実習を行っている3人のメンバーで息の合った演奏をお届けできればと思います。(文責：田頭)

2. ピアノ三重奏曲第1番第1楽章 Op.49 (メンデルスゾーン)

Pf. 司馬康 (4年)

Vn. 舟川開 (4年)

Vc. 勝矢雄之 (4年)

シューマンが絶賛したというこの曲は、メンデルスゾーンらしい魅力的な旋律が非常に印象的です。一度聴いたら「ああ、あの曲」とわかる親しみやすさがあり、「メントリ」といわれて愛されています。作曲されたのは1839年、メンデルスゾーンが30歳の時です。第1楽章はソナタ形式で、ピアノの名手だったメンデルスゾーンらしくピアノが全体的に大活躍します。第1主題は、哀感のこもった旋律がチェロによってまず提示されますが、バイオリンが美しく歌い継ぎ、ピアノが華麗に展開して曲が進行していきます。伸びやかな第2主題もチェロがまず提示し、ピアノとバイオリンが次々に歌い上げます。展開部はピアノが特に活躍します。再現部でチェロが第1主題を歌うとき、バイオリンがこの上なく美しい旋律を奏でます。結尾部にはピアノの見せ場もあります。ピアノ・バイオリン・チェロの特色が見事に生かされた流麗な音楽をお楽しみ下さい。



3. Il balen del suo sorriso (G. Verdi)

Bar. 伊藤薫 (5年)

Pf. 田頭祥之助 (5年)

「イル・トロヴァトーレ」第2幕第2場より、ルーナ伯爵の最も有名なアリア。伯爵は、想いを寄せるレオノーラが修道院に入るのを阻止しようとしている。彼女は恋人マンリーコが伯爵との決闘で殺された信じ、絶望して神に仕える道を選んだのである。伯爵はレオノーラを神に渡すことすら拒絶し、彼女は自分のものだと言明して自らの愛を高らかに歌い上げる

人影も歌声もない。間に合ったようだ。

彼女の微笑みの輝きは 星の輝きにも勝る

大胆か…激しい恋心と憤りが、私を突き動かすのだ。

彼女の美しい顔の輝きは わが胸に勇気を奮い起す

恋敵は死に、もはや邪魔するものはないかに見えた。

ああ、燃え上がる愛よ！ 私のために話してくれ

だが、彼女は新たに強力な敵を用意した…祭壇とは…。

わが胸の嵐を鎮めてくれ 彼女の瞳の中の太陽よ！

いや！彼女は他のだれにも渡さない！レオノーラは私のものだ！

4. レシタティーヴォとスケルツォカプリス (フリッツ・クライスラー)

Vn. 小林香音 (慶應義塾大学4年)

オーストリア出身の名ヴァイオリニストであるクライスラーは、作曲家としても、幅広い聴衆層にアピールできるような、華やかでかつお洒落な数々の小品の作曲を行いました。この曲はイザイに献呈された曲で、レシタティーボとは"話すような独唱"という意味で、後半のスケルツォはヴァイオリンの様々な技術を生かしたお洒落で華やかな曲です。

5. ヴォカリーズ Op.34-14 (ラフマニノフ)

Pf. 司馬康 (4年)

Vc. 勝矢雄之 (4年)

ヴォカリーズとは歌詞のない歌のことで、原曲は嬰ハ短調です。ピアノと歌のために作曲されましたが、ラフマニノフの生前から人気が高く、さまざまに編曲されて親しまれてきました。今回演奏するのはチェロとピアノに編曲されたもので、ホ短調になります。ホ短調の印象としては、悲しさと純粋さを感じられます。この曲では、まずピアノが淡々と和音を演奏し、チェロが主旋律を奏でます。そのうち対旋律も登場し、精妙な和音の移り変わりとともに哀感が曲全般に漂う、とてもラフマニノフらしい曲です。曲の最後にピアノが主旋律を歌うのですが、澄明な美しさで、これはホ短調ならではないと思います。この曲の魅力が少しでもお伝えできるような演奏ができれば幸いです。

6. 美しく青きドナウ (J. シュトラウス作曲 萩原俊雄編曲)

Vn. 松井丈迪 (5年), 舟川開 (4年), 植松優 (東京藝術大学 4年)

Vc. 福馬伸章 (循環器内科 OB)

Fl. 度會亜衣子 (3年)

Pf. 奥野周平 (3年)



『美しく青きドナウ』は、1867年にヨハン・シュトラウス2世が元々は合唱用に作曲したウィнна・ワルツです。現在はオーケストラで演奏されることが多いです。親しみやすいメロディーで、聴いたことがある方も多いと思います。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートではアンコールの定番ともなっており、オーストリアの第2国歌といわれるほど国民に親しまれています。今回は弦楽器にフルートとピアノを合わせた編曲版を演奏いたします。原曲との響きの違いを楽しんでいただければと思います。(文責：松井)

7. La Serenata (Gaetano Braga)

Fl. 小倉彩加 (2年)

Pf. 徳永陽菜 (2年)

この曲は、イタリア出身のチェリストであり作曲家である Gaetano Braga (1829.6.9~1907.11.20) の一番の出世作と言われています。原曲は歌曲「ワラキアの伝説」で、病床で天使の呼びかけを夢うつつに聞く少女と枕元で心配そうに見守る母の対話形式で曲が進められており、コンセプトはシューベルトの「魔王」と似ています。6/8拍子で奏でられる美しいメロディーをどうぞお聴きください。

8. 無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番"バラード"、無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番 2楽章 (ウジェーヌ・イザイ)

Vn. 小林香音 (慶應義塾大学 4年)

イザイはベルギーの大ヴァイオリニストであり作曲家です。J.S.バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタをヴァイオリニストであるヨーゼフ・シゲティが演奏したのを聴き、イザイは全6曲の無伴奏ヴァイオリンソナタを書き上げました。この経緯から、各所にバッハのソナタに影響を受けたパッセージやモチーフが見られ、かつイザイらしい半音階的な独特な旋律も織り込まれています。第1番はシゲティに捧げられ、シゲティの持つ厳格な音色を意識して、荘厳なソナタになっています。今回は第2楽章"フーガ"を演奏します。冒頭で提示される主題が声部を変えて随所に現れます。

第3番"バラード"はジョージ・エネスコに捧げられた、単一楽章の曲です。最初はどこか不気味な雰囲気を感じさせますが、舞曲のような力強い主題や、流れるようなメロディ、幻想的な箇所など場面ごとに様々なキャラクターが見られます。

9. うたをうたうとき (作曲：木下牧子 詞：まど・みちお)、ヒスイ (作曲：信長貴富 詞：寺山修司)

Sop. 澤村萌 (5年), 岩田千尋 (5年), 小林瑞季 (4年)

Alt. 清水滯里 (5年), 小高美和 (4年), 岡本姫奈 (3年), 度會亜衣子 (3年)

Ten. 及川光久 (6年), 長谷川友宏 (6年)

Bas. 波戸智裕 (4年), 辻有恒 (4年), 桃井悠作 (4年), 佐藤匠 (3年)

私たちは医学部医学科の学生で集まり、「鉄門合唱」として活動をしております。実習や授業の合間を縫って練習を重ね参りました。今回は M1 から M4 まで合わせて 13 名で日本語の曲を二曲お届けします。

一曲目「うたをうたうとき」はクラシック作品や合唱曲を数多く手がけている木下牧子の作品です。作詞のまど・みちおは童謡「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」でご存知の方も多いのではないでしょうか。

歌への愛に溢れた歌詞に美しいメロディーが添えられた一曲です。どうぞ言葉に耳を澄ませてお聴きください。

二曲目は信長貴富作曲「ヒスイ」（無伴奏混声合唱のための「カウボーイ・ポップ」より）。短歌・詩から戯曲・映画に至るまで幅広い文芸作品を生み出した寺山修司の詩による作品です。

過ぎ去りし青春の甘酸っぱい思い出を描いた詩を、信長先生らしい軽快なリズムと綺麗な音楽に乗せた、爽やかさ溢れる名曲です。

寺山修司×信長貴富の黄金コンビの織り成す魅力をお届けできればと思います。お楽しみ下さい。



10. ヴァイオリンソナタ 第5番「春」第1楽章（ベートーヴェン）

Vn. 山崎玄稀（2年）

Pf. 徳永陽菜（2年）

今回演奏するヴァイオリンソナタ第5番は、ベートーヴェンのヴァイオリンソナタの中でも特に有名なもので、彼の死後、「春」というタイトルで愛されてきました。また、漫画『のだめカンタービレ』に登場するなど、日本でも親しまれている作品です。

この曲の魅力の一つは、「春」というタイトルの通り、新緑の鮮やかさや春風の心地よさが感じられるような明るい旋律です。会場の皆様にもそんな「春」を感じて幸せな気持ちになっていただけるような演奏をお届けできれば良いなと思っています。

11. スペイン舞曲（マヌエル・デ・ファリャ）

Vn. 小林香音（慶應義塾大学4年）

Pf. 司馬康（4年）

ファリャはスペインの作曲家で、マドリッドでピアノと作曲を学び、舞台音楽作品を数多く作りました。作曲を学んだ師の影響で、スペイン民族音楽、とりわけフラメンコに興味を持ち、多くの作品にその影響が見られます。今回演奏する"スペイン舞曲"は、ファリャが1905年に作曲した"はかなき人生"というオペラからの抜粋です。第2幕から、クライスラーがヴァイオリンとピアノ用に編曲しました。華やかで情熱的で、ときに哀愁も感じさせる曲です。

12. プニャーニの様式による前奏曲とアレグロ（フリッツ・クライスラー）

Vn. 杉田祥太郎（3年）

Pf. 成家悠太（5年）

フリッツ・クライスラー（1875～1962）は、20世紀を代表する世界的なヴァイオリニストです。彼はウィーンで生まれ、父親は医者でした。3歳からヴァイオリンを始め、7歳でウィーン音楽院に入学し、そこでは作曲家ブルックナーにも師事し、首席で卒業しました。その後も天才ぶりを発揮し、世界中で演奏活動を行い、名声を博しました。

クライスラーは作曲家としても極めて優れていました。クライスラーは当初、この作品を、演奏旅行先の図書館で「発見した」イタリアの作曲家プニャーニ（1731～1798）の未発表曲の編曲であると発表しました。しかし、後にクライスラー自身が「自作である」と告白し（!）、センセーションを巻き起こしました。（通称：作曲家詐称事件）

大変密度の濃く、クライスラーの曲の中でも特に聴き応えがあります。技巧的で表現するのが難しい曲ですが、冒頭の痛切で悲劇的な主題、それに続くバロック形式でありながらどこか近代的な響きのフレーズ、最後のドラマチックなクライマックス、どれも心を揺さぶる素敵な曲です。

13. ピアノ四重奏曲第2番 イ長調 作品26 第1,4楽章（ブラームス）

Vn. 小林香音（慶應義塾大学4年）

Va. 横山金海（桐朋学園大学4年）

Vc. 深川晴登（4年）

Pf. 司馬康（4年）

ピアノ奏者から見た室内楽の楽しみというのは、ピアノソロの作品よりも複雑で多様な音楽を作りうるという点にあります。そういう意味においてブラームスの室内楽曲は、彼が遺したピアノソロ作品に比べ何倍も魅力的であると確信しています。今回とりあげたピアノ四重奏曲第2番

も、4つの楽器からそれぞれ異なる音楽性を引き出し、その総体として1つの音楽を作り上げる喜びの感じられる素晴らしい作品です。今日でこそブラームスが遺した全3曲のピアノ四重奏曲の中では演奏頻度は少ないものの、その叙情性に溢れた曲調から、3曲の中でも際立った存在感があります。ブラームスは、同じ編成でありながら性格的には対照的な曲を同時進行で創作することが多く、この第2番も作曲時期は第1番と近接しながら、曲調は驚くほど対照的であるのが面白いところです。

全4楽章の演奏時間は50分ほどで、これはブラームスの室内楽曲の中でも特に大きな規模を誇ります。今回演奏するのは第1,4楽章です。

第1楽章 *Allegro non troppo* は、冒頭ピアノにより提示される優美な第1主題が印象的。この第1主題は、多少の変形を伴いつつ、楽器を変えながら曲の随所で顔を現し、1楽章全体に統一感を与えています。と同時に、このモチーフの強弱や音色の変化が一つの大きな聴きどころにもなっています。また、弦とピアノがお互いを煽動しながら盛り上がっていく展開部は、非常に濃密でいかにもブラームスです。

第4楽章 *Allegro* は、ピアノ四重奏曲第1番と対をなすように、民俗舞曲風でジブシー音楽の要素が感じられる終楽章になっています。しかし第1番の終楽章ほどの緊張感はなく、第2番を一貫する伸び伸びとした優雅さはここでも支配的です。曲が進行するにつれ様々なエピソードが登場しますが、中でも、不安定な調性で流れていく箇所は曲に良いアクセントを与えていると思います。最後、コーダはロンド主題を再現して爽快地に締めくくられます。(文責：司馬)

弦楽四重奏第2番3楽章(ボロディン)、弦楽四重奏第1番1,2楽章(チャイコフスキー)

Vn. 1st 清川篤(東京医科大学5年), 2nd 長谷川理彩(医学部健康総合科学科5年)

Va. 友田寛人(5年)

Vc. 高須美香(東京医科大学5年)

昨年度結成して2019年3月に演奏会を行った、全国の医学部4年生(現5年生)合同オケ「オーケストラ・ラボール」のメンバーで結成されたカルテットです。

1曲目は、医師でもあり化学者でもあり「日曜作曲家」でもあったロシアの作曲家、ボロディンの作品です。ボロディンとその妻、エカテリーナは、エカテリーナが結核で療養中にサナトリウムで開いた演奏会が出会いのきっかけと言われています。結核の治療薬もなかった時代、エカテリーナは生死の境を彷徨いますが病を乗り越え、無事ボロディンと結ばれます。この弦楽四重奏曲はボロディンが妻のエカテリーナに愛を告白した20周年記念に捧げられた曲です。その中でもこの第3楽章は *Notturmo* (ノクターン、夜想曲) という題名を持ち、美しく繊細な旋律が際立ちます。ありふれた解釈ではありますが、初めてお聞きになる方はまずチェロの低音と1stヴァイオリンの高音をそれぞれボロディンとその妻に見立て、それぞれのメロディーの絡み合いを楽しんでみてはいかがでしょうか。

2曲目は、同じロシアの弦楽四重奏の名曲だからということなのか、CDや演奏会でもカップリングされがちなチャイコフスキーの弦楽四重奏曲第1番です。第1楽章は聞き慣れない曲である上に、8分の9拍子を2-3-2-2で分割する独特なリズムも一見掴みづらいかもしれませんが、深く考えずこのリズムを感じたままに聞いていただければと思います。そして第2楽章はかの有名な「アンダンテ・カンタービレ」です。ボロディンもチャイコフスキーもロシアらしい、美しいメロディーの作曲に長けていましたが、その中でも大きな違いが感じられるはずですので、聴き比べてお楽しみいただければ幸いです。(文責：友田)

14. ヴァイオリンとピアノのためのソナタ イ短調(フランク)

Vn. 松井丈迪(5年)(第1楽章), 友田寛人(5年)(第2楽章), 武田直久(3年)(第3楽章), 川本哲史(5年)(第4楽章)

Pf. 田頭祥之助(5年)(第1楽章), 成家悠太(5年)(第2,4楽章), 奥野周平(3年)(第3楽章)

フランクはバイオリンソナタを一曲しか作りませんでした、その一曲はフランス近代バイオリン音楽史上の稀に見る金字塔として称えられる一曲となりました。この曲がフランス語で“*Sonata Pour Violin et Piano*”(訳『バイオリンとピアノのためのソナタ』)と呼ばれていることからわかるように、この曲ではバイオリンとピアノは音楽的に対等な関係性を持っており、他の室内楽曲とはまた違った演奏する楽しさをバイオリニストとピアニストが共有することができる曲でもあります。第1楽章・第1主題の最初の上昇下降する旋律形が4楽章を通じての基礎的楽想となっています。曲の全体でここからあらゆる楽想を導き出されており、全楽章に有機的な連絡が生まれています。

当初M3(5年生)数人の中で「フランクのソナタを弾きたい」という声が上がったのがこの企画のきっかけでした。せっかくなら、4つの楽章をみんなで分担して弾いてみよう!というその場の思いつきで「フランク4楽章を7人で分担して演奏する」という本企画が誕生しました。同じ旋律が所々に散りばめられていますので、演奏者による曲想の捉え方や表現の仕方の変化を含めて似た旋律がそれぞれの楽章でどのように演奏されるかに注目すると特に面白いかもしれません。(文責：武田・成家)

